

### 直接抗グロブリン試験編

さあ困った・・・、赤血球自己抗体！こんなときどうする??

◎屋宜 宣直<sup>1)</sup>

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター<sup>1)</sup>

直接抗グロブリン試験（以下 DAT）は、生体内で赤血球に免疫グロブリンや補体が感作しているかどうかを確認するための検査である。主に、自己免疫性溶血性貧血（以下 AIHA）や、胎児・新生児溶血性疾患（HDFN）、遅発性溶血性副作用（DHTR）等の診断に有用である。本セッションでは、DAT 陽性時の対応、特に赤血球自己抗体（以下自己抗体）陽性時の考え方について述べる。

一般的に、AIHA における自己抗体はその反応温度から温式と冷式に分類され、温式が AIHA 全体の 9 割を占める。通常、DAT 陽性となり、検査に難渋する 경우가しばしばある。DAT 陽性結果の全てに臨床的意義があるわけではなく、患者の溶血所見の有無に左右される。併せて確認すべき項目に、患者の不規則抗体の有無、直近 3 ヶ月以内の輸血歴の有無、投与薬剤や造血幹細胞移植の有無等がある。

DAT 陽性時には、赤血球抗体解離試験を実施しなければならないが、抗体解離法にも様々なものがあり、目的に合った方法を選択することが重要である。

AIHA における自己抗体は通常、汎反応性であり、スクリーニング血球及びパネル血球のすべてに凝集が認められる。そのため、同種抗体が共存している場合、その検出が困難となり、自己血球や同種血球を用いた抗体吸着法が必要となるが、その血球選択にも注意しなければならない。AIHA に対する赤血球輸血は、さらなる溶血を招く危険性があり、可能な限り避けるのが一般的であるが、患者状態によっては実施する場合もある。自己抗体保有患者への赤血球製剤選択で気を付けることは、溶血所見や同種抗体の有無、自己抗体の特異性であり、特に同種抗体と反応させないことや、同種抗体産生予防に重きを置くことである。

輸血担当技師の役割は、患者にとって最適な製剤を正しく迅速に選択することである。しかしながら、AIHA 症例等の検査では、慣れないうちは難渋することが多いと思われる。正しい基礎知識や検査方法、結果の解釈を理解することで、より迅速な対処が可能と考える。